

「キリストの体は一つ」(エフェソ四章一〜一六節)

1 教会の誕生

本日は聖霊降臨祭、ペンテコステです。復活祭(イースター)が今年には会堂礼拝休止の期間にあつたので、ペンテコステといわれても、あまりピンと来ない感じがします。しかしペンテコステが教会にとつてもっとも大切な記念の日であることに変わりはありません。

この日は、イエス・キリストの復活の日から数えて五十日目に当たります。イエスが地上を去った日、昇天日と申しますが、この昇天日から十日後の主日が聖霊降臨祭として祝われてきました。

ご承知のように、使徒言行録第二章に、このペンテコステの出来事が書いてあります。イエスを天に見送ったあと、ペトロ、ヤコブ、ヨハネなどの使徒をはじめ、百二十人ばかりの人が、エルサレム市内で集まっていたときです。聖霊が降り、それに満たされた使徒たちが聖霊の語らせるままに語り出した、しかもいろいろの国の言葉で語り出したというのです。まことに不思議な出来事で、ちょうどユダヤの五旬祭でい로운な国から巡礼に来ていた人たちはこれを聞いて、自分の国の言葉で使徒たちが話していることにあつけにとられ、驚いたとあります。

実態がどういうことであつたのか、正確には分からないところがありますが、そこで起こったことの本質は、人々の反応に明らかにされています。

使徒言行録第二章のペンテコステの記事の一部をお読みします。

人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディアナ、エラムからの者がおり、またメソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは」(二・七〜一一)。

この最後の言葉、「彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは」、ここに、ペンテコステの出来事とは何であつたか、明らかにされているように思います。

それは使徒たちの言葉が、周辺地域から来た、いや当時でいえば世界中から来たといつていい、しかも立場もいろいろ違う人々に、神を証しする言葉、神を語る言葉として聞こえた、届いたということです。教会の言葉が宣教の言葉となつた、これがペンテコステの出来事の意味です。かくて教会は聖霊の力において神を証しする群れとして世に生まれ出た。ペンテコステは教会の誕生日です。そこで今日は教会について少し考えてみたいと思います。

いま教会が「聖霊の力において神を証しする群れとなった」と申しましたが、今日の聖書に入る前に、教会と聖霊の深い関係を、改めて私どもの記憶に呼び起こしておきたいと思います。

使徒信条を思い起こしていただいてもよいと思います。使徒信条で教会は、聖霊への信仰の中で出て来ます。すなわち、「われは聖霊を信ず」と告白し、そのまま聖なる公同の教会、聖徒の交わりを信ずと告白しています。聖霊を信じるとは教会を信じることです。逆に、教会を信じるといふのは、聖霊を信じるといふことです。なるほど、私どもがこの目に見える教会は、人と人とが織りなす共同体です。しかし教会の本質はそうした何かしら人間の共同体であることに尽きるものではありません。ここに聖霊がいますし、働いておられる。それは目に見えない。しかしこの見えない聖霊がなければ、教会は、その存在においても、働きにおいてもそもそも成り立たないのです。この見える教会で、見えない聖霊を信ず。それゆえ私どもは見える教会に、それがどのような現状であっても、望みをかけることをやめない。こうしたことが、使徒信条で告白する「われは聖霊を信ず」の意味です。それゆえ私どもは礼拝のたびに、聖霊を求めて祈るのです。

2 エフェソ書と教会

さて今日の聖書、エフェソ書といえは、昔から教会論と相場が決まっています、私どももそのように教えられてきました。じつさいその通りで、代々の教会は、このパウロの手紙から、教会について理解を深めてきたのです。

この手紙にほかのことが書いてないわけではありません。当然です。ただ教会に関する教えが多いのには、理由があるように思います。それはエフェソの教会の会員がユダヤ人ではなくて、ほとんどが異邦人であったことと関係があります。実際パウロは、異邦人のための使徒として(三・一)働き、労苦して伝道し、この教会を建てたのです。

初代教会におけるパウロの福音理解のもっとも大きな特色は、神の救いが、イエスの十字架の死と復活によって、異邦人に、万人に開かれたというものでした。これこそが神の「秘められた計画」(三・二)であって、パウロはそれを啓示によって知らされたといっています。その場合、それなら、ユダヤ人の救いと異邦人の救いの関係はどうなるのでしょうか。パウロは、三章でこう言っています。

異邦人が福音によってキリスト・イエスにおいて、約束されたものをわたしたちと一緒に受け継ぐ者、同じ体に属する者、同じ約束にあずかる者となるということです(三・六)。

「わたしたち」とは、パウロもその出身であるところのユダヤ人のことです。異邦人の救いとは、異邦人が、ユダヤ人とは別に新たなイスラエルとなることでも、新たな教会を立ち上げることもありません。異邦人が、イスラエルにすでに与えられた神の救いの約束と一緒に受け継ぐ者となること、イスラエルと同じ一つの神の民に加えられるということです。

異邦人は、神の憐れみ(二・四)により神の民に加えられ、ユダヤ人でキリスト者である人たちと共に一つの教会を形成し、一つの体、すなわち、キリストの体として造り上げられていく。エフェソ教会のユダヤ人の数がどの程度か分かりませんが、相当少数です。しかし少数の彼らを含めて教会は、イエス・キリストの一つの群れとして歩んでいるのです。それゆえに、パウロにとって、救いのもっとも具体的な現実として、教会の在り方は、重要なことであつたのです。これこそ教会がこの手紙で切実な問題として取り上げられる理由です。

ところで、いま引用した三章六節にも、「同じ体に属する者」という言い回しがありました。

教会は、聖書で、とくにパウロによつて、キリストの体と呼ばれます。教会はキリストの体？ イメージするのをもっとも難しい言葉の一つです。私は、こんなふうと考えています。イエス・キリストのご生涯は地上でまだ終わっていない、むしろイエスはすでに天にあります。その天にあるイエスが、地上でなお歩みを進めている、それがキリストの体としての教会だと。天におられるイエスは、地上では、とくに体の頭(かしら)と呼ばれます。このイエスと私も一人一人は聖霊によつて結びられ、そのかぎり、私も自身も互いに兄弟姉妹として結びつけられてキリストの体を形成し、歩んでいるのです。

3 一致、多様性、成長

さて今日私どもに与えられている聖書、それは、こうしたキリストの体なる教会について、その三つの要素を取り上げ、解明し、私どもに与えられている約束と恵みを明らかにしているところです。

三つとは、第一に、教会の一致です。第二に、教会の多様性です。この多様性は一致における多様性であり、一致は多様性における一致です。三つ目は、こうした一致と多様性の中にあるキリストの体としての教会の、また私ども一人一人の成長と成熟です。さて第一に教会の一致です。

神から招かれたのですから、その招きにふさわしく歩み、一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもつて互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい。体は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです。主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ、すべてのものの父である神は唯一であつて、すべてのものを通して働き、すべてのものの内におられます(一〜六節)。

ここところは、私どもは逆算して考えて行ったほうがいいかも知れません。つまり私どもは、教会に加えられているかぎり、すでに互いの一致の中に置かれているのです。その一致は、神は唯一ということに最終的な基礎をもちます。しかし同時にパウロは「努めなさい」という言葉も使っています。それゆえ私どもはここにパウロが勧めているように、謙遜、柔和、寛容、愛による忍耐、霊の一致を求めていくのです。そのようにしてイエスは、その体である教会として、なおこの世を、この地上を歩ん

でおられます。

第二に教会の多様性です。

しかし、わたしたち一人一人に、キリストの賜物のはかりに従って、恵みが与えられています。・・・そして、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教師、ある人を牧者、教師とされたのです（七、一一節）。

途中八節以下は、大切なのですが、少し煩雑になるので、割愛します。私どもにはまさに「一人一人に」、多様な賜物が与えられています。「神の国にはユニフォームも工業製品もない」（バルト、一九一九年の説教から）。賜物が生かされ用いられてキリストの体はつくり上げられています。

ここには「使徒」とか「牧者」とか「教師」とか、教会の職務をあらわす言葉が出てくるので「キリストの賜物」とはそういうものであって、ふつうの信徒には関係がないと読みとられがちですが、もちろんそうではありません。「わたしたち一人一人に」という言葉は、教会の職務の担い手だけを指すのではなく、この手紙の受取人であるすべての教会員を指しています。何か人並み優れた才能でないと賜物といえないというわけではありません。考え方は逆です。つまり私どもの持っているもの、たとえそれが自分にどんなに小さなものに見えようとも、神から与えられたものとして受け取るならそれは「賜物」であり恵みなのです。私どもはそれを自分のためではなく神のために用いることに、いっそう気を配るべきです。

最後に、こうした教会の、また私ども一人一人の成長、成熟です。

ついには、わたしたちはみな、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。こうして、わたしたちは、もはや未熟なものではなくなり、人々を誤りに導こうとする悪賢い人間の、風のように変わりやすい教えに、もてあそばれたり、引き回されることなく、むしろ、愛に根ざして真理を語り、あらゆる面で頭であるキリストに向かって成長していきます（二三〜一五節）。

教会に私どもは加えられて、キリストの体の部分、肢体として歩みを進める中、教会も、私どもも成熟し、成長していきます。

この箇所にはその様子が描かれています。私どもは教会において信仰だけでなく知識においても一つとされ、キリストのうちに満ちているもので満たされ、その豊かさの中で、成人した、いわば大人のキリスト者として成熟・成長すると約束されています。もはや私どもは誤った教えに振り回されたりせず、愛と真実に生きて、天のキリストに向かって歩んでいくのです。

教会は、こうした者たちの集まりとして、キリストの体として、世の中を歩み、神を証しします。ペンテコステはその教会の誕生日です。今日は改めてその原点に立ち返って歩んでまいりましょう。